
勇者って一人じゃないんですか？

Kelten

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者つて一人じゃないんですか？

【Nコード】

N1157Y

【作者名】

Kelten

【あらすじ】

ドラゴンクエストの世界に勇者は一人しかいないのか？

ラダトーム城の兵士（転生者）は勇者の物語に深く関わっていく。

プロローグ

「勇者って一人じゃないんですか？」

ラダトーム城の謁見室に俺の素朴な質問が響いた。

人間は理解しあえるんだ。うん、今理解できた。だってみんな目が言ってる。

（お前はだまれ！）

そして俺は勇者5人の謁見が終わるまで黙って立っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

俺の名前はケルテン ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士である。まだ新任の為任務が何なのか知らないが権限だけはすごい。王様と国務大臣以外の命令を拒否できるうえ、城の中に立ち入れない場所はほとんどない。

俺がこの世界がアレフガルドと認識したのは10年前、何の脈絡もなくこの世界がドラゴンクエストの世界だと認識した。平和な時代で400年ほど前に大魔王が現れロトの勇者が退治したという伝説がある。つまり近い未来に竜王が現れる。そう理解した俺はそれに備え自らを鍛えた。そう自分を育ててくれた湖上都市リムルダ―

ルを守れるぐらいに。で何の因果かラダトーム城で兵士をやっている。しかも勇者の謁見とはこの物語の最高の見せ場だと張り切っていた。

ちなみに俺の位置は下の通り特等席である。

- - - - -
近衛隊長 近衛 近衛 近衛

王様 勇者

- - - - -
国務大臣 俺 近衛 近衛

プロロ・グ(後書き)

見切り発車

準備

時は5時間ほど前に遡る。

ラダトーム城兵士宿舎 食堂

俺はいつも朝のトレーニングの後食事をする。

食事の後は王室図書館にて史書を漁り、知識を貯める。

昼からは新任の挨拶周りをするのがここ一ヶ月の日課だ。

でも今日は違った。食事の最中、近衛のサイモンがやってきた。

「おついたいた。お前昼からの謁見に立てって命令だ。大臣からの伝言な。」

こいつは不良近衛騎士のサイモン。見た目は金髪碧眼で美形、さらに貴族の三男坊のくせに少し残念なやつだ。一度俺と衝突してから俺お前の仲だ。

「おい、なんか失礼なこと考えていないか？」

「あれっ顔にでてたか。で、王様への謁見は近衛騎士が立つのが決まりじゃないのか？」

「お前なあ。まあいい、今日は勇者の謁見だからな。大臣の隣につけよ。」

「とうとう勇者のお出ましか。いや光栄なことだな。」

「そうか？まっ人それぞれだからな。昼の謁見15分前に控え室に集合な、典礼用の装備で。」

「まじか！典礼用装備。あれ嫌いなんだけど。」

典礼用装備。鉄の鎧、鉄の槍、鉄の盾、腰に鉄の剣のフル装備で総重量20kg以上、しかも無駄に豪華な作りをしている。

「俺は好きだけどな。いかにも騎士って感じだろ。」

「お前はムキムキだからな。俺みたいな軽装備にはきつい。」

「どうせ立っているだけだ。じゃまた後でな。」

他人事だと思って勝手なこと言う。俺の戦闘スタイルは革鎧に両片手刀で魔法の併用だ。しょうがないから今日はいいとして、次の為に典礼用の革鎧を用意しよう大臣に頼もうかな。

おお勇者ロトの志を継ぎし者よ

「勇者ガルドどの、ご入場」

謁見室に勇者の入場を告げる声が響き、黒髪短髪、身長2m弱、ごつい体の男が入ってくる。しずしずと歩み寄り王座の手前で片膝をつく。

「勇者ガルド、まかりこしました。」

ブラボー!!!なんて感動的なシーンだ。俺はこの場にあることを精霊ルビスに感謝する。

「おお勇者ロトの志を継ぎし者よ、よくぞ来てくれた。」

あれ?なんかセリフがおかしいぞ。志? 血じゃないの?

「今アレフガルドは、竜王によって光を奪われ絶望の下にある。そなたがまことの勇者なら竜王を倒し光の玉を取り戻してくれ。なお勇者への支援に関しては大臣より仔細説明をうけよ」

俺の横で大臣が一步前にでて説明を始めた。

「今ラダトーム王家ラルス16世の名において勇者ガルドとの契約が成された。」

一つ、ラダトーム王家は準備金として100ゴールドを勇者に与える。

一つ、ラダト・ム王家は勇者の生命に対してできる限りの支援を行なう。なお血の契約において生命失 われしときでも蘇生が可能である。

一つ、勇者はラダトーム王家御用達の宿屋、武器屋、道具屋において割引サービスを受けることがで きる。

一つ、勇者は王家準騎士として扱う。なお装備品として同等のものを所持する権利も与えられる。

一つ、勇者が獲得したモンスター素材は王家が専属で買い上げる。

一つ、………

(なんだこれ？いやに生々しい契約だな。血の契約ってなんだ？割引サービス？買取？俺は混乱しているようだ。まだ大臣が何か言っているようだ。何も聞こえない。というか聞きたくない。あゝ あゝ 何も聞こえなくない)

ふと我にかえると勇者が大臣の差し出した紙に血判を押している。

「最後に王は公人ゆえに口にできぬが、さらわれし王女ロ・ラの命を案じて折られる。もしそなたが姫を助けてきたならば、臣下にして最高の恩賞が与えられるであろう。では行くがよい勇者ガルドよ」

そして勇者が退出していく。なんと言うか想像していたのとは違うが儀式は終わった。と思った。

「では次の勇者を入れよ」

「勇者ドゥーマンどの、ご入場」

で冒頭の一言「勇者って一人じゃないんですか？」

勇者支援官 兼 査察官って何？

今俺の前で大臣が怒って怒鳴っている。

「もう少しで台無しになるところだったのだぞ、次の勇者の耳に入らなかったからよかったものを。」

「まあまあ大臣殿、ケルテンも知らずに口に下までのことだし、大事には至らなかったのですからよろしいではないですか。」

「私が怒っているのは知らなかったことではないですよ、近衛隊長殿。そなたの部下が十分な説明をしなかったことに腹をたてているのです。部下の教育は正しく行なっていただきたいものですな。」

（うへっ！怒りの矛先がかわった。近衛隊長もサイモンも小さくなってる。）

「いえね、大臣。俺は知らなかったのですよ、ケルテンが知らないことをね。てつきりすでに大臣が説明しているものだと・・・。」

大臣は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「もうよい！では改めて説明しよう。ケルテン何か質問はあるかね。」

「はい、では質問させて頂きます。勇者は唯一人、しかもロトの血を引くものではないのですか。そう理解しているつもりでしたが？」

「なるほどよく勉強しているな。勇者ロトの伝説とロトの預言書か。」

「ここ一月の間王立図書館で調べた中の公文書にあったのがロトの伝説とロトの預言書だ。俺の知っている事実といくらか異なるが大筋であつてる。さらに国内にある無責任な噂（結果的には正しいのだが）を利用して半年前にラダトーム王家が国中に布告をだした。」

勇者ロトの伝説：およそ400年前、アレフガルドを絶望に落とし、大魔王がいた。この災難に対してラダトーム王家は異世界から勇者を召喚しこれを討伐させた。

ロトの預言書：大魔王は死に際して言い残した。我死すともいわずれ第二の魔王が現れるであろう。

国民の噂：ロトの勇者の血を引きし新たな勇者が現れ、この国を助けてくれるだろう。

「ここ一月の間王立図書館で調べた中の公文書にあつたのがロトの伝説とロトの預言書だ。俺の知っている事実といくらか異なるが大筋であつてる。さらに国内にある無責任な噂（結果的には正しいのだが）を利用して半年前にラダトーム王家が国中に布告をだした。」

『「この国難に王家は勇者を公募する。我と思わん者はラダトーム城まで出でよ。」』

（俺が知っている答えと現実の情報は大臣のそれと一致する。では何が違うのか？）

「そう怪訝な顔をするな。概ね正しいが問題がある。まず第一にもロトの血に連なる者が現れても証明するすべがない。そしてその

者が必ずしも魔王を討伐できるとは限らない。」

「では偽者かもしれない者を勇者として招き入れているということですか？」

「そうだ。だが一人一人にはお前こそロトの勇者として招き入れているのだ。だが何人の勇者が現れようと一向に構わぬ、そのうちの一人が目的を達成すればよい！」

いや、そこでキリッってどや顔されても困るんですが……。

「しかしそれでは泥棒に金をやるようなものではないですか？」

「だからお前がいるのだ。」

えっ！俺となんの関係があるんだよ。

「そこでだ。改めてお前に任務を与える。ラダトーム王家國務大臣
付き特務隊士 勇者支援官 兼 査察官だ。」

勇者システムの実情

「ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士 勇者支援官 兼 査察官
?」

「そつだ。お前には今日謁見した勇者5人を担当してもらつう。まず支援だが、勇者への助言、救助、レベル管理を主にする。」

「レベル?」

実のところ、この世界では敵を倒してもレベルが上がって強くなったりしない。地道な訓練と経験、素質でしか強くなれない。だからレベルなんてないのだが?

「うむ。各々の勇者の持ち込む素材によってレベルを決める。簡単に言えば倒したモンスターの証明だ。このレベルに応じてどの程度のことが可能か助言するがよい。詳しいレベル管理については素材買取所の者に聞くがよい。」

なるほど。スライムの素材をいくつか持ってきたら、次にスライムベス、ドラキー・・・と強いモンスターと戦わせればいいのか。これが経験値で、買取でゴールドを与える。つじつまはあうな。

「そして一番大変と思われるのが救助だ。もしなんらかの理由で勇者が行動不能もしくは死亡した場合、速やかに現地に行つて救助するのだ。尚、死亡していた場合したいが残つておれば王家に伝わる秘術によつて蘇生が可能だ。この任務ゆえにお前が特務隊士に抜擢されたと言つても過言ではない。」

「どういうことだ。それだけなら近衛の連中でもできるような気もするが・・・？」

「お前の疑問はわかる。この任務に大事なものは強さはもちろんのこと、魔法が不可欠だ。その中でもルーラ、ベホイミが最も重要になる。救助に行ったはいいが戻ってこれないのでは意味がないからな。現状ではそこまでの魔法が使える者で腕の立つものは少ない。残念ながら近衛でも隊長と副隊長ぐらいしかいないのだ。ケルテン、お前は全ての魔法を会得していたな。」

「ええ使えますよ、全てをね。」

「ならば勇者を救助後、ベホイミによる回復やルーラでの帰還を行なうのだ。」

「しかし勇者の行動不能、死亡、現在位置などは張り付いていなければわからないのでは？」

「その点は問題ない。私の執務室の壁にある世界地図があるな。あれで仔細がわかるようになっておる。それを含めての血の契約だ。」

「なるほど、そのような魔法があるとは知りませんでした。」

「これも王家の秘術よ。知らぬのも無理はない。それはともかくも一つの任務だが、勇者として力量が足りぬ者、器量が足りぬ者がいたならば、査察官として解任する権限を与える。なお口頭による宣言だけでなく説得も必要だ。ちなみに先月までに旅立った勇者は20名だが現在残っているものは5名しかおらぬ。」

「ちなみに力量や器量の基準はどういったもので？」

「それはお前に一任する。解任される者が納得いかぬ場合もあるうが説得の方法も一任する。」

「え〜とつ、それは私の気分でやめさせることができ、さらに気に入らないやつはぶん殴つてもやめさせろつてことですよね！」

「そうだ。察しがいいではないか。ちなみに先月までに旅立った勇者は20名だが現在残っているものは5名しかおらぬ。お前以外に2名の特務隊士が同じく任務についておるが大体実力行使が必要だつたらしいぞ。まあお前は近衛隊長と互角に戦えると聞く。せいぜいがんばるがよい。」

ちよ、だれがそんなこと言った。大臣の隣で近衛隊長とサイモンがニヤニヤしている。お前らか。

「いえ、近衛隊長には一方的に負けています。」

「あの勝負は私の方が一方的に有利なルールの元行なわれたもので謙遜することはない。お前を推挙した私の顔もたててくれ。がっはっはっ！」

近衛隊長が腕を組んで笑っている。隣のサイモンがサムズアップしている。何がグツ！だ。あとで締める。

「それにこれはもう決定事項だ。快く拝命せよ。」

「はあ、わかりました。特務隊士ケルテン 勇者支援官兼査察官 拝命いたします。」

腹が立つので嫌味たらしく片膝を付き、右手を心臓の前に沿える最敬礼で答えてやる。

「よい。任務に励め。」

くそつまるで嫌味が効かない。さすが国王の実弟で王位継承権2位だけはある。これだから高貴な生まれな方は困る。

「最後にもう一つある。もし今夜にでも城下で女を侍らせて酒宴に興じておる不届き者がいたら、即解任、さらに500Gの罰金をさせよ。罪状は国王様への詐欺罪だ。これで国庫への負担はほぼ無くなる。」

うわっなんて悪辣な。5人のうち一人くらいそんなやつはいるだろう。準備金100Gは高くないってわけだ。しかし素直に聞くはずもないから、全ての厄介事を俺に押し付ける腹だ。

「そう嫌な顔をするな。今までおよそ半数がそれで脱落しておる。無条件でお金や名誉がもらえらると思っておる輩は少くないぞ。」

「わかりました。もういいです。せいぜいがんばりますよ。」

おれは重装備を引きずるように退室した。

考察：魔法とステータス

部屋に戻った俺は重い装備を所定の木人形にかけていく。典礼用の装備は細部は結構華奢にできているので装備しないときは部屋の隅の木人形にて片付けておかないといけない。そこににやにやしたサイモンが入ってくる。

「よっおつかれ！さっきは悪かったな。」

「そう思うなら手伝え。片付けるのも手間だ。自分に着せるより面倒くさい。」

「了解。しかしそんなに重いのが嫌なら魔法使い用の正装でよかったですじゃね？」

「ああ、それも考えてはみたんだがある理由があって止めた。」

サイモンが手を止めて聞き返す。

「ある理由とは？」

「さぼるなよ。まあ大した理由じゃないが、まず魔法使いの地位が低い。」

「そうか？おれはすごいと思うけどな。ベギラマとかベホイミとか俺には使えないからな。」

この時代の魔法は過去のロト一行が使用していた魔法に較べてかなり劣る。物語のはじめの作品とかそういう問題だけでは解決でき

ない理由が実際にはあるはずだ。そう思って過去の文献等調べたのはもう5年ほど前からか、今ではそれでとんでもない量の報告書が書ける。ただ報告する義務もないし、唯一の俺のアドバンテージを知られるのも困る。そう俺は全ての魔法が使える。ベギラマではなくベギラゴン、ベホイミでなくベホマ、それ以外の全ての魔法すらアレフガルド中を旅して発掘、解読、会得している。そういった理由を踏まえてこの時代の魔法使いは地位が低いと理解している。

「そういうがベギラマの一撃と君らの剣の一撃、与えるダメージは大差ない。ならばMPを消費しない剣の方が強い。またベホイミで回復できる量もそれと大差ない。かつてのロトの時代の大地を焼き払い、天より雷を落とし、死人すら蘇らせる魔法が使えるわけではないからな。」

俺は嘘をつく。使える魔法を使えないふりをする。この強大な魔法を公表したくない。これは多分ロトの勇者の決定と違わないと思う。戦乱の時代には究極の武器になるかもしれないが平和の時代には強力な暴力となる。またもし竜王側が使えるようになると互いの使用する魔法は被害を拡大するであろうことは想像に難くない。

「ふ〜ん、そんなものか？お前は学者みたいなことを言うんだな。でもよお、そんな強力な魔法が使えたら竜王軍もいちころじゃね？」

気軽に言ってくれる。物を簡単に考えすぎる。こいつは剣の力量は近衛でも上の方、魔法も簡単なホイミ、ギラ程度なら使用できるが双方を別物として考えることしかできない。もっとも片手剣と盾を使用する戦闘スタイルでは魔法は使いづらい。どちらかの手を空けないと魔法を発動できないから戦闘開始にギラ、ベギラマを放ち、戦闘終了後に回復を行なうのが一般的である。

「もしの話はいい。しかし懐かしい称号だ。ここの兵士になるまで戦う学者って言われてた。」

「一日の半分は図書館にいるお前らしいいい称号だ。よしできた。」

サイモンが最後のパーツを木人形に取り付け終わった。

「サンキユ。でさっきの話だが魔法使いのローブ姿は動きづらいから嫌だ。第一格好よくない。」

「プツ。クツクツク！やっぱりお前は面白いな。好きにするがいいさ、俺じゃねえし。」

「あきれたやつだな。よく近衛騎士になれたなお前？」

俺は肩をすくめて言う。近衛にあるまじき軽さだ。

「俺もそう思うよ。先の戦いで兄貴が死ななかつたら間違いなく貴族の次男坊って気軽な身分でいれたらうよ。だれにとつてかは知らんが迷惑な話だ。」

「お前が言うな！」

文句を言いながら革の服を着る。自作の特別製で動きやすく軽い。必要な場所だけ金属板で補強してある。籠手も脛当ても同様だ。最後にこれもマイラの鍛冶に作らせた特別製の刀を佩く。刀を作る技術は廃れていたが代々伝わっている秘伝書を解読して作ってもらった。それから更なる改良を重ねて今ではお気に入りの一刀だ。力の強くない俺には使いやすい装備である。

ここからは俺なりのステータスの考察である。
 ちなみにステータスは確認できない。もちろんステータス確認画面なんか出てこない。他人と手合わせしたりして相対的に理解できるぐらいであるが俺、サイモン、近衛隊長の身体能力は次の通りである。

	俺	サイモン	近衛隊長
力	C	B+	A
すばやさ	B	C+	B
賢さ	A	D	C
HP	C+	A-	A
MP	B-	D	C

記号は俺評価で、Aは数値にすると201〜250 B151〜200 C101〜150 D51〜100 E1〜50で、数値の+はふり幅の上、-が下と考えている。例外の数字としてSの250〜255、Fの0（無）としている。Sはお目にかかったことはないがFは純粋な戦士のMPに該当する。

俺に較べて隊長の化け物具合がわかると思うが、サイモンも十分強い。しかもまだ伸びしろがある辺りに空恐ろしさを感じる。力のCというのは鉄の装備ができるぎりぎりの域である。ただし装備するとすばやさ犠牲になる。ゆえに俺は標準戦闘スタイルは捨てた。それでも普通に戦えば隊長には勝てない。多分サイモン相手でも5割勝てればいい方である。

次に賢さだが俺のAは転生ゆえの知識が上乘せされている。総合すると魔法使いか盗賊推奨のステータスだ。賢さはDあれば下級の魔法が使用できる。Cもあれば中級魔法、つまりこの時代の全ての魔法が使用できる。だからこの時代に賢さB以上は棄ててステータス

になる。魔法はワンワードスペルではなく詠唱（発音必須ではない）方式で、理解できない詠唱を丸覚えで使用している。簡単に言うとギラといえば火の玉がでるわけではなく、口頭か頭の中で詠唱してラストワードとしてギラと唱える必要がある。実際はもっと難しくMPの消費、マナとの融合などの基本があるのだがここは割愛する。

総合して俺は隊長に勝てるかというと普通は無理だ。だが俺にしかできない魔法を使用すると可能になる。答えは能力上昇系魔法の使用、具体的にはピオリム（すばやさB：約170はすばやさS：255にする）を2回かける。すばやさB：約170はすばやさS：255に化ける。他にはバイキルトやスカラの使用も有効である。騎士同士の試合は双方構えてからの戦いなので魔法を使用する時間はいくらでもある。かくして俺はそれなりの強さを認められている。

大臣室の地図

「よし準備完了。愉快的な任務じゃないが行って来る。」

「おう、がんばれよ。応援しているぞ。」

「なんかお前に応援されると、馬鹿にされてる気がする。」

とりあえず今日の勇者5人の詳細と居場所を確認する為に大臣の執務室に向かうことにする。執務室へ行くには城の一階奥の二回への階段を上る。ここには常時二名の兵士が詰めている。もちろん俺は顔パスだ。他には大臣、近衛騎士なども顔パスだ。二階に上ると近衛の詰め所がある。反対側が大臣ら文官の執務室にである。ちなみに中央に謁見室があり、その裏側が王様らのパーソナルスペースになっていて、立ち入りは大臣と近衛隊長以外は許されていない。

玉座

国務大

臣地

扉

執務

室 図

- 扉 -

近衛騎士

扉

扉

の書類の上に右手を水晶球に左手をかざす。すると一つの光点が強く光り水晶球に見知らぬ男達の姿が映った。

「見よ。これが血の契約の効果の一つだ。この契約書の人間をこちらの遠見の球に移すことができる。少量のMPを消費するが便利なものだ。」

「これはだれですか？」

「これは勇者12とその一行だ。固有名詞は書類にある通りだ。」

書類にはエイブラムとある。固有名詞で呼べばいいのに。勇者12つてひどくね？

「先も述べたが勇者が何人いようとかわわぬ。同じくそれが誰でも一向に構わぬ。現在いる勇者は12、25、41、42、43そして今月の51、52、53、54、55の十名だ。」

なるほど数字の前が謁見した月、後ろが謁見順か。

「なるほど一月、二月が一名ずつ三月は全滅で四月は豊作ってことですか。」

「ふん。だれがどうでもかまわん。お前は自分の担当勇者のみ気にすればよい。」

うわっ！一気に機嫌が悪くなった。やっぱり王族だ、下々のことなど気にも留めぬか。

「わかりました。では調べさせていただきます。今月の勇者はこの

5枚ですね。」

勇者51 マイラ出身ガルド 大斧の使い手 嗚呼あのごついやつか。現在位置はと……水晶球に手を当て魔力を送り込む。もう城外にいるようだな……とりあえず問題なし。

勇者52 ラダトーム出身ドオーマン うっ記憶にない。居場所……城下で同行者2名か。

勇者53 ラダトーム出身クロウ またしても全く記憶にない。こいつも城下で同行者2名と。

勇者54 ラダトーム出身ゲオルグ やっぱり記憶にない。完全に意識が無かったようだ。反省せねば……こいつも同行者2名？ちよつと映像を拡大……なるほど、こいつら三名はいつしょか。もしかするとあかんかも？

勇者55 出身地不明アレフ 15歳 若いな。まつ18の俺が偉そうに言うことでもないか。ふむ居場所は城下町。ただし一人……。

最悪今日一日で4人解任しなくてはならないか。うっん、我がことながら大変だな。

「大体わかりました。でも本当にいいんですか？500Gとっても」

「かまわん。我々王族に対して詐欺を行なったのだ。死刑でもかまわないぐらいだ。」

やべっ 触れてはならないところに触れたようだ。とぼっちちりが来
ないうちに退避するんだよ。じゅ。

城下町の宿屋

城下町にやってまいりました。当たり前といえば当たり前だが、？の離れた所にある町ではなく同じ城壁内にある？、？のタイプである。この城下町はとも大きく公称の人口で10万人、竜王出現後は集落を失った民が流れ込んでいて20万人とも言われている。10万人といえば多く感じられるかもしれないが、通常兵士一人を維持するには千人の民が必要といわれている。このぐらいの人口がなければ騎士団は維持できない。ちなみに各地の人口はマイラの村5000人、地下の町ガライ8000人、湖上都市リムルダール20000人、砂漠都市ドムドール30000人（現在不明）、城塞都市メルキド50000人とされており、またそれ以外にも小集落が多数あった。過去形なのが残念である。リムルダール、ドムドール、メルキドはラダトームに多額の税金を払うことで一応の自治を許されている。

さてさっきの勇者達の光点の位置はたしか王家御用達の宿屋の辺りだが・・・なんだ俺が使っていた定宿じゃないか。この宿は俺も結構世話になってたし挨拶ぐらいしておくか。しかしこの宿代は50Gほどだったと覚えているが、もしかして勇者割引で8Gとかになるとか言わないよな。としようもないことを考えながら宿屋に入る。人の良さそうな親父がこちらを確認する。

「久しぶりです。親父さん。」

「おお学者か？城への任官はどうなった。一月も音沙汰無しで心配したぞ。」

「すみません。かなり忙しかったもので。」

心底うれしそうな親父さんがボトルを取り出しながら言う。

「ということは無事任官できたんだな。それはめでたい。今日は奢らせてもらおうよ。」

「いやゴメン。まだ任務中なんでそれはまた今度で。」

「ふくん。まだ仕事ってどこに配属された？お前の腕なら一般兵ってことはなかるう。」

「うん。知らないかも知れないけど国務大臣付き特務隊士。」

その名を聞いて親父さんの顔が曇る。その表情からは心配そうな感情と嫌悪が感じられる。あまりいいイメージがないようだ。俺の顔色を見て親父さんの顔が元に戻った。

「嗚呼その任務自体は問題ない。まあできれば補助金の金額をもう少し上げてもらえると助かるが……。いや今は忘れてくれ。」

「????。なんか都合の悪いこともあるのか？」

「特務隊士なら勇者の視察だな。五月の勇者が四人ほどチエツクインしてる。内三人の態度が以上に悪い。女の従業員に手出すは、部屋にけち付けるはで散々だ。全くあんな安い金でVIP扱いしろって冗談じゃない。ああ城批判じゃないからな。念のためな。」

「はあ。補助金も大した額ではないようだ。気の毒でしょうがない。しかしまあやっぱあの三人は駄目なようだ。気が滅入るな。」

「そうですか。で、そいつらはどこですか？」

「さつき出て行った。ただで飲ませてやる酒はないって言ったら椅子蹴飛ばして出て行ったよ。」

「じゃあ。待たせてもらうよ。水もらえる？」

俺はカウンターに腰をかけた。親父がグラスに水をいれてよこす。

「水だけでなく何か食べていってくれよ。結構もらってるんだろ？」

「残念ながら初任給は四日後だ。しばらく我慢だ。それとこれから荒事になりそうなんだ。あまり腹を膨らませるわけにはいかない。」

「そうか？契約金とかあるはずじゃないか？」

「嫌なこと思い出させるね。契約金は推薦者のリムルダールの義父のものだよ。」

「お前の義父って、確かあの町長だよな。」

「そつ、全部税金だよ。去年は竜王のせいで十分な税金が集まらなかったらしい。なにが城で見識を深めて来いだよ。俺は売られたんだよ。」

「しょうがないさ。城の取立ては結構きびしいらしいぜ。お前さんの義父も苦労してるのさ。」

「わかってるよ。別に恨んだりしてないさ。ただ文句の一つくらい

言ってもいいだろ！」

自治権との引き換えの税金が各都市にある。これはその年の取れ高を考慮したりしない。だからお金や物で納められない場合は人で払う場合がある。その場合町で優秀な人材を城に推挙し契約金という形で納めたことにするのである。前例では近衛騎士になった者は数えるほどしかないらしい。それでも一万Gだったらしいから、俺の10万Gは破格だ。リムルダール町長と近衛隊長の推薦を聞いた大臣の顔は見ものだったらしい。まあ栄転ということで喜んでくれる人が大多数だし、王立図書館の閲覧ができるようになった俺はその言葉どおり見識を深めることができご満悦である。

宿屋の入り口の扉が音をたてて誰か入ってくる。若いというより幼さの残る顔をしている。見覚えがある。たしか勇者55、ああ駄目だ駄目だ、番号で呼ぶのは頭の中といえ失礼だ。え〜とアレフだ。「只今戻りました。食事をお願いしたいのですがお金が少ないので一番安いので。」

「わかった。食事はどこへもっていけばよい。ここか？部屋か？」

「ここでお願いします。」

やけに低姿勢だな。まあ威張り腐っているよりは十倍はましだ。銅の剣、革の盾、皮の鎧。鎧が真新しいということは買い替えたのか。俺が勇者アレフを見定めていると俺の隣で直立した。

「先程謁見室でお会いしましたね。勇者アレフです。多分これからお世話になると思います。よろしくおねがいします。」

驚いた。俺は覚えていないのに俺を覚えている。(うそ。俺は呆けていただけ。)

「おっおう。俺は勇者支援官のケルテンという。こちらこそよろしく。」

「王様にお礼を伝えてください。鎧を買い換えることができました。」

「なんか雰囲気にも飲まれて敗北感でいっぱいである。謙虚さでも人は押されることあるんだな。」

「ええ、必ず伝えますよ。君も頑張ってください。」

「もう挨拶はいいだろう。さあ食事だ。食べて英気を養いな。」

宿屋の親父さんが食事をテーブルに並べる。結構な量だ。

「あの私が頼んだのは一番安い食事でしたが・・・?」

「いいんだ。若いんだ、たくさん食べて強くなってもらわないとな。勇者さまだろ。」

「そつだそつだ頂いておけ。城から補助金もでていするしな。なつ親父!」

補助金の話でまた親父の顔が少し曇る。一瞬の間の後俺と親父は大爆笑する。アレフはあつけにとられている。不愉快なことだらけの今日一日だったがこいつに会えてよかった気がする。

「おいおい、手が止まってるぞ。」

「すみません。なんかすぐくて。」

「毎朝ここにいるから、そのときだけ教えてやる。じゃあ俺は終わったからあとは自分で続けること。剣と盾は終わったらその辺の見習いに返しておいて。」

言っただけ言つと俺は練習場を立ち去った。今日はやることがいっぱいあるからあまり付き合ってやれない。昨日の連中を解任しなくてはならないし、賠償金の支払い手続きもいる。さらに勇者51はどこへ行ったのか気になる。今日も忙しくなりそうだ。

「わかった。死刑になるのは嫌だ。だろっ？」

残る二人に同意を求める。当然縦に首が振られる。

「よし、では詳しいことをつめようか。買取金額のうち半分は即賠償金としてもらう。残る半分は自由に使っていていい。その金で余分に賠償金を払おうが、生活費や装備などに使用するのも自由だ。最高で三人で3000G相当の素材を買い取ることができるな。」

「えらい段取りがいいな？もしかして最初から決定事項か？」

「そうかなり悪辣な罠だよ。大臣に聞いたときもそう思った。まあ高い授業料と思うんだな。」

三人がため息をついてうなだれる。

「あと一ヶ月に一度は報告に来てくれ。もし遠征で一週間以上連絡が取れなくなる予定がある場合も事前に相談してくれ。具体的に言うと徒歩ならガライは3日、マイラは5日、リムルダールなら2週間にかかる。例えばリムルダール近郊にいるゴールドマンなら1体で1000Gになるが・・・」

ここで三人の顔を見る。

「なあ、人の顔を値踏みするように見ないでくれ。」

「いや悪気があるわけじゃない。どの程度までならいけるか考えていた。」

「で、俺達にいけそうなのはどこまでだ？」

「そうだな。二、三日はラダトーム近郊で遠征費用を稼ぐ。その後ガライへの遠征で野営に慣れるべきだな。あとはガライから帰ってきてから相談だな。」

このとき三人は呆れたような顔で俺を見つめていた。

「何？顔に何かついてるのか？」

「あんた自分が何言ってるか分かってるのか？その見識と自信はどこからでてくる？むしろあんたが勇者だって名乗りでもいいぐらいいだ！いや今からでもそうするべきだ。」

あれっそう言われりゃそうだ。自分が異分子だと判断して大きく世界に関わらないようにしてきたし、自分は勇者じゃないと思ってたから……。

「まあ俺のことは置いて、君らの話を続けよう。さっきも言ったようにガライに行って帰ってこれるようになってくれ。いいな。」

「はあ。最初からあんたに会えてればよかったのに。そうすればこんなことにはならなかったのに。」

「なあ俺らはどうしていればよかったんだ？教えてくれよ。」

しばらく考える。こいつらはもともと銅の剣、こん棒、布の服を着、革の盾を持っていた。で前衛2、後衛1……ならば俺ならこつする。

「そうだな。まずもらった300Gで革の鎧を2着買う。ゲオルと

クロウの分だ。あとクロウに革の盾を一つ買う。これで残金は70Gだ。ここまでやって残りで遊興にいそしめばよかった。最低でも翌日からの意思が表明できた。あと革の鎧だったら俺には投げられていない。襟がつかめないからな。じゃあ俺は次の予定があるからまたな。」

部屋をでて俺は外に向かう。物分りのいい連中でよかった。もつとこねてくるかと思った。次は勇者51ことガルドだ。大臣の執務室で調べるかな。

美女と魔法談義

大臣の執務室だ。簡単に昨日の結末と後始末について大臣に説明する。さして興味もなさそうに大臣はいった。

「それについてはそれでよい。であとの二人は有望か？」

「分かりません。ただ内一名が私に師事してまいりましたので許可してしまいましたが、よろしかったですか？」

「かまわぬ些細なことだ。だが役に立たないと判断したなら速やかに放逐せよ。」

相変わらず大臣はある程度の身分以下の人間にたいして厳しい。選民意識の強い人だ。個人的には好きではないが国務大臣ともなると、いちいち下々のことなど気にもかけぬのも当たり前か。

「では残る勇者51について調べます。」

抽斗から勇者51ことガルドの書類をだす。書類に右手、水晶球に左手を置き魔力を送り込む。地図上の光点の一つがより強く光り、水晶球に歩く姿が映し出される。場所は・・・こことマイラの間ぐらいか。

徒歩にしては脚が速いな。問題は今の所無しか。

「では失礼します。」

退室する俺に大臣は一瞥すらしない。

- - - - -

厄介になると思われた今日の予定が半日ほどで終わった。残った時間は図書館で消費するとする。

ラダトーム城一階にある王立図書館。ここには美人の司書官がいる。彼女は宮廷魔術師を兼任していて、馬鹿は嫌いと公言しているにも関わらず近衛騎士やら貴族のぼんぼんの来館に頭を悩ましている。

「マギー！今日は来れたよ。」

俺は軽口を叩いて入館する。ここ一ヶ月毎日通っていたが昨日は来ることができなかった。しばらくここに来る機会はぐつと減るだろう。では今日のうちに俺なりの研究結果を教えてやってもいいかな？

「ケルテーン！もう昨日はどうしたのよ。ずっと待ってたのよ。」

「おいおい！聞いていないのかよ。勇者査察官に任命されたんだ。大変だったんだぜ。」

マギーが抱きついてくる。この人は自分が美人な自覚がない。おまけに胸が大きいのも気にしていない。俺はどきどきと通り越してばくばくしている鼓動を抑えるのに必死である。照れくさいのを隠すように文句を言う。俺の鉄の剣が大きくなる前に放してくれてよかった。

「それね、馬鹿どもが言ってたのは。」

「俺がここに来なくなるなんて無いよ。まだ読んでいない本がいっぱいあるしね。」

俺がこの城に来た最大の理由がここにある。この図書館には門外不出の文献がいっぱいある。ロトの洞窟、雨の祠、虹の祠（雨と虹の祠は単独で存在しておらず小集落に祠があった。）などのロトの足跡を追い始めたのは5年ほど前、存在していたはずの技術を探し求めた。その集大成がここにあった。

「わたしは？」

マギーは怒ったように言う。

「いや君に会えるのもうれい。また魔法談義ができるし。」

そう俺が気に入られているのはその一点に尽きる。彼女は二言目には『かつて魔法使いは天を地を人を思うように操れたはず。』と言って今の魔法に満足していない。

「じゃあその魔法談義で許してあげる。」

「OK! じゃあ準備するからそこで待ってて。できれば飲み物を用意してほしいな。」

図書館を歩き回って幾つかの本を持ってテーブルに付く。マギーは不器用にお茶を入れている。大体いつもの通りだ。

「じゃあ始めようか。今日は俺の推察したことについてだ。」

まず第一にギラはギラじゃない。さらにベギラマはベギラマでは

ない。意味分かる？」

「わかんない。ギラはギラでしょ？」

「そうだろうね。俺も同じこと聞いたらそう答える。じゃあこれ見て。」

俺は本を取って挿絵のあるページを開く。挿絵にはギラを使う魔法使いと説明書きがある。また別の本を取って開く。こちらには魔法の説明がある。

「これが何？ギラの説明でしょ？」

「この絵をよく見て、ギラで大地を焼き払ってるだろ。」

「そうとも見えるね。」

「じゃあ、君のギラで同じ事できる？」

「無理ね。火球が出るだけ、こんな風に焼き払うことはできない。」

「次、ここにある記述”ベギラマはギラの上位魔法である。”これについて、さてベギラマはギラの上位魔法か？」

この質問にマギーは首をかしげる。斜め右上を見上げながら何か考えている顔はとても美しい。

「そうね。そういえばおかしいわね。ギラは火球の魔法、ベギラマは稲妻の魔法。全然違う。」

俺はさもこの文献で解かったかのように説明する。ただ事実を述べているにすぎないのだが、この時代のギラは実はメラである。同じようにベギラマはなんとライデインである。この事実に気づいたとき俺は失われた魔法を再現できる可能性にも気づいた。今それを始めて他人に洩らしている。

「次に魔法の詠唱内容について、これは今意味の解からない言葉を丸暗記して詠唱している。そうだよな？」

「そうよ。はるか昔口トの勇者一行から教えられた魔法は口伝のみね。」

「俺の考えでは当時アレフガルドには魔法技術が低かったと思っ
ている。そこにそれらを自由に操る大魔王たちがこの地を征服した。
そして同じく魔法を駆使できる勇者が光臨して大魔王を倒した。こ
のとき少しの魔法が伝授された。」

「だめよ！その名前を口にしてはいけない。」

「なにが？大魔王のこと？本当の名前も知らないのに！」

「やめて！呪いが・・・何か悪いことがおこるかもしれないじゃな
い。」

「わかった。その名はもう口にしない。俺が悪かった。」

今現在、大魔王ゾーマの名は伝わっていない。大魔王と口にする
ことすら禁忌とされている。口にすることで蘇るかもしれないと無
意識に恐れられている。

「うん。あるわね。」

マジーの目が輝いている。ちよつと俺は意地悪をする。

「さて、じゃあ俺から質問。今俺が答えを持っているとする。君はその答えを知りたいか？」

「駄目！そんなカンニングみたいなことしたくない。」

「OK！じゃあヒントをあげよう。詠唱2小節目3小節目は全ての魔法で一致する。さてこれはいかに？」

「もういいわ。自分で解明してみる。時間はあるから。」

この勝気な感じもたまらないな。多分答えを教えたら二度と口をきいてくれないだろう。手元の紙に詠唱文をかきながらうんうんうなってる。俺も昔やったな。口述するのが日本語だとしたら、詠唱は英語みたいなものだ。意味が分からないから片仮名で詠唱する。口伝なので発音の仕方も習う。元々口トは外国人みたいなものだから言葉も苦労しただろうし、魔法に使われる特殊言語に至っては説明するのは不可能だったに違いない。数ある魔法の詠唱文の解読は大変だったな。数ある魔法・・・そういえば開かずの間・・・あつできるかもしれない。

「そうだ。例の開かずの間、試してみてもいいかな。」

「はあ？あんた何言ってるの！昔から該当する鍵も見つかからないし、有名な鍵師でも開けられないゆえに開かずの間なのよ！」

カチツ！シリンドーが400年ぶりに音をたてる。

「何？今の魔法。」

「ロストマジックの一つ開錠魔法アバカム。教えて欲しい？」

「意地悪ね。でもまだ駄目、私じゃあまだ早い。」

「君の意見を尊重するよ。じゃあ入ってみようか？」

「それはこの宝箱の中身見てから決めようぜ。」

そう言つて10cm立方ほどの宝箱を空けた。中には紫色の布に包まれた鍵一つ。持ち手から伸びるただ一本の棒だけで一見してどんな鍵にもあつことはなさそうである。

「何これ？鍵にしては何の突起もないわね。使えるの？」

「そうだね。見た目は唯の棒みたいな感じだけどね・・・」

俺はそう言いながら先端を手で触つてみる。やはりそうだこの金属は不定形でいかなる形にでも変化する。

「うん。間違いないこれは最後の鍵。いかなる錠でも開けることのできるロトの秘宝。」

「え〜！でも開かずの間の中にあつたら意味ないじゃない？」

「そうだね。だけどそれ故にここに置いた勇者の意思が感じられるね。きつと勇者はこの鍵もこの世界には不必要なものと判断したんだ。」

「この鍵も？どついう意味。含みがあるわね。」

「鋭いね。一字一句に引つかかるとは。」

マギーはその豊かな胸をはって言う。

「馬鹿にしないで！これでもアレフガルドの賢者って言われたこ

「ともあるのよ。」

「まあ賢者つてのは誇大だね。」

「単なる比喩表現よ！それはそうと話を逸らさないで。」

「ごまかせないか。うんじゃあまた俺の推察なんだけどロトの勇者達は可能なのに魔法や技術を伝承しなかったと思っっている。」

「なんで？すばらしい技術は伝承するべきでなくて？」

「うんそうだね。君は善良で平和な人だからそう言うと思ったよ。」

「どついう意味よ！また馬鹿にしてるでしょ！！」

「いや褒めてるんだ。その考え方を忘れないで欲しいな。」

おれは肩をすくめて言う。

「ならいいけど、でも説明して！」

「例えば大人数を即死させるような魔法や一個大隊を一撃で爆死させるような魔法があるとして、それを君が嫌いな貴族のぼんぼんが覚えたとする。さらに今現在竜王がいないとして彼らはその魔法を何に使うだろうか？」

「そんなの敵がないのだから使い道ないわ。」

「残念。答えは言うことを聞かない相手に使う。」

「そんなひどいことするわけないじゃない。」

「そう？君も貴族の御令嬢だから判ってると思うけど、言うことを聞かない奴隷や家来に暴力を振るう貴族は少なくないよね。」

マギーはその口に両手を当て驚きの声を上げる

「あっ！」

「そう。力の大きさの違いだけでやることは変わらない。現在リムルダールとメルキドが自治区になっているけど、このことを苦々しく思う人間は少なくないと思うよ。城側の意向はできるなら直轄地に戻したいし、自治側は最終的に独立を考えているかもしれない。これらの解決策に力は必須なんだ。」

「判った。もういいわ。」

「そう。続けるね。多分ロトは今言ったことを理解していたんだ。残念ながら彼の旅路はモンスターとだけの戦いではなかったからね。だからこそこの地ではその力を封印した。彼らの死後それらの力が使用されないようにね。」

「なるほどね。でもあなたはそれを掘り出して使えるようにしているのはロトの意思に反しているのではなくて？」

「うっ！耳が痛いね。でも各地に古文書なり口伝による伝承者がいたのは、再びこの地に災厄が襲ってきたときの為だと思うんだ。彼は災厄の復活を予言していたから。」

「そういえばそうね。じゃああなたはいいことをしているんだ。」

「さてね。もしかして豹変してこの国を征服するかもよ！」

「フフフツ！じゃあそのときは私があなを殺してあげる。」

「怖っ！心しておくよ。死にたくないのね。」

プツ！あっはっはツ……。その雰囲気になんか耐え切れず二人は笑う。

「はあ。こんなに笑ったのは久しぶりね。でもあなたはさっき言った魔法も使えるのね。多分。」

「怖い？」

「いえ。あなたは力の使い方を知っている人だと思うから怖くないわ。」

「ありがとう。」

あれっ！目から涙が……。悲しくなんか無いの？気が付くと俺の頭はマギーの胸に抱かれていた。しばらくそのまま時間が過ぎる。

・
・
・

「はあ！なんかゴメン。」

「いいの。あなたにも弱いところがあるのがわかってうれしいわ。」

「うわ〜なんだか恥ずかしい。俺が俺じゃないみたいだ。」

急に我に返つてのたうち回る。そんな俺の肩をポンとマギーが叩く。

「なんかあったら私に相談しなさい。お姉さんが相談に乗ってあげる。」

「うん、そうするよ。お・ね・え・さ・ん!」

「君にお姉さんと言われるとなんかむかつく。やっぱそれ無し。」

そして二人で今日二回目の大笑いをした。そうだね。俺18、マギーは22、それは言っちゃ駄目だよな。

「とりあえずここを出ようか。また日を改めて調べるから。」

「そうね。お風呂にでも入りたい気分。」

「じゃあマイラにでも行く? いい温泉知ってるよ?」

「きつと君のことだから行けるんだね。もう何を言われても驚かなくなっちゃった。」

「うん。行けるよ。これも知りたい?」

「止めとく。今日の宿題ができてからでいい。でも温泉には行きた
い。」

「OK!ではこの鍵は君に預けておく。俺には必要ないからね。」

「でもこんな大事なもの!」

「君に持っていて欲しいんだ。二人の秘密さ。」

「わかった。絶対身から放さない。」

二人は開かずの間改め、ロトの部屋を後にした。

マイラの温泉は行ったのかって?もちろん行ったさ。1泊して城に戻った。

何?昨夜はお楽しみでしたね?うるせーよ。

開かずの間（後書き）

魔法の詠唱、時代考証等作者の勝手な妄想です。ご了承ください。

勇者二人

あれから3日が過ぎた。勇者ガルドはマイラ近郊で狩りをしている。まさに狩りだ。両手持ちの斧を振ってほぼ一撃でことが済んでしまつとはすごい臂力だ。もしかするとちからSかもしれない。期待できるかもしれない。城に戻ってきたら面談することにしよう。

さて我が弟子アレフだ。朝一で俺の部屋にやってくると、ぜひ見て欲しいことがあるとうれしそうに言う。それで訓練所に来て、俺の目の前で素振り100本10セットを終わらせた。

「これは驚いた。まさか3日でできるようになるとはね。」

「その気になれば20セットでも30セットでもできますよ。多分。」

まじか。才能って怖いね。多分って言うけど嘘だね。やったんだ。無茶をする。この訓練の最大のからくりはホイミにある。無理な負担を筋肉にかけると筋繊維が断裂する。それをホイミで強引に直すとなると超回復する。

「よしっ！ではその木偶を斬ってみ。」

アレフは木偶の前に立つと鉄の剣をすらりと抜く。そして構えから一気に振りぬくと即元に戻す。元に戻した後得意げにこちらを見る。俺は斬られた木偶に近づき確認する。麦わらを切り裂いて芯棒を抉っている。もし人の腕なら骨までいつてるな。

「合格だ。わざわざ言わなくても自分で判っているようだし、次の

ステップへ進むか。」

「はい！でも一ついいですか？」

「何？何かわからないことでもあるの？」

「違います。ケルテン師匠が斬るのを一度見てみたいのです。」

「えっ！木偶を？」

「はい！」

俺は頭をぼりぼりと掻きながら答える。

「あくなんと言つか。後で怒られるんだ。備品を大事にしろ！つてね。」

「はあ？」

「だよね。そういう返事しか出てこないよね。判った。一度だけ見せる。」

刀を抜いて中段に構える。気合と共に斬りつける。そして残心。刀を納める頃、袈裟がけに斬られた上半分がすべり落ちた。アレフの顔が壊れた木偶と俺の顔を往復する。さらに斬り口を見ている。

「もつやらないよ。もつたないからね。」

「どうやったらこんな斬り口になるんですか？私にもできますか？」

「無理だね。武器が違う。君達の武器は叩き斬る武器、俺のは斬る武器。振り方も全く違う。だから同じことができる必要はない。」

「でもそれ使ってみたいです。」

「駄目。さつきも言ったように振り方が違う。君の振り方で使うと折れる可能性がある。これはちからの弱いのを力バーする為に特注した俺だけの武器。だから駄目。」

「そうですか……。」

「そう残念そうな顔をするな。純粋なちからならアレフ、君の方がずっと強い。俺の力はC評価、君はB評価、しかもまだ伸びしろがあるからもしかするとA評価もありえるかも？」

「A評価、B、C????なんですか?それ。」

「ああ俺独自の評価だ。ちから、すばやさを大体5段階でする評価だ。もちろんAが上でEが一番下だ。」

「はあ?」

「ちなみに君はB、B-ってところだ。伸びればA-、Bぐらいになれるかもしれない。」

「そのマイナスってのは?」

「ああ、同じBでも幅があるからね。Aに近いBはB+、Bに近いAはA-と表現しているだけ。まあ人はその日の体調や心理で多少上下するから参考までの評価だ。」

「面白い評価基準ですね。考えたこともなかったです。それでケルテン師匠は？」

「俺か？まあC、Aととこかな。結構鍛えたけどちからはこれ以上伸びなかった。素質の問題らしい。ちなみにちからは鉄のフル装備ができるぎりぎりぐらいだ。もっともそうすると重くてせつかくのすばやさが生かせない。本当は攻防バランスのとれたいい装備なんだけど、死にたくないからその装備はしない。」

「なるほどよくわかりました。この装備が私には適していると言うことですね。」

「そういうこと。では次のステップだ。まず武器を納めて両手を下げ自然体で立つ。」

アレフは言われたとおり立つ。鉄の剣は腰に納められ、左手の盾は逆さまになる（盾は左上腕部に固定されている為、使用時には左手で握り手をつかみ、腕を上曲げなくてはならない。）

「まずそこから抜剣しつつ斜め上に斬撃。」

アレフはシュパツと音を立てて抜き撃つ

「次、いつもの斬撃、即納剣。」

残撃はいいが納剣でもたつく。まあそんなところだろう。

「これを100本。シュパツ、シュ、シャキーンぐらいのタイミン
グでできれば完璧。ああ剣を納めたら必ず自然体に戻る。」

「むずかしいですね。手本を見せてもらっていいですか？」

「いいよ。」

おれは自然体から居合いで逆袈裟、振り上げた所で両手持ちで袈裟懸け、そして納刀。自然体に戻す。ん！いま一瞬殺気？を感じた。

「流れるようですね。武器を戻すことの意味は？」

「あちよつと待って。その影にいる方、見るならこちらでどうぞ。ここは訓練所です。見られて困ることはありません。」

建物の影から体格のいい大男が出てくる。

「わりいわりい。別に隠れてみるつもりは無かったんだが、なんか昔師匠に教えられたようなことやってるなって思わず脚が止まった。ってお前学者じゃないか？懐かしいな。」

「もしかして達人ですか。2年ぶりくらいですか？」

こいつはサバイバルの達人（俺がつけたあだ名だ。俺のあだ名をつけたのはこいつ）薬草学が得意な武闘家。アレフガルドを旅してまわったときよくつるんで冒険したのはいい思い出。互いに右腕を当てて挨拶をする。

「なんであなたがここに？」

「おまえこそ？」

「今月から大臣の下で勇者の支援をやっています。」

「奇遇だな。俺はその勇者をやっている。2月からだ。」

「あの〜すみません。」

いかんいかん。あまりに懐かしくて自分の弟子を忘れていた。

「紹介します。彼はガイラ・ガラ・ライガ、古い友人です。無手で闘う流派の末裔です。ガイラ、彼が私の弟子のアレフです。彼も勇者です。まあ見習いですが……。」

「なるほどねえ。お前さんが弟子をとったとは……。」

「いえ。ちょっとありましてね。推しかけ弟子といつかなんと言っていたいやら。断れなくてですね。」

そこにアレフが口を挟む。

「挨拶が遅れました。師匠ケルテンの弟子アレフです。よろしくお願ひします。」

「おう！俺はガイラ。武器も持てねえ、魔法も使えねえが拳一つで勇者やってる。しかしまあお前さん見る目あるよ。いい師匠もったな。」

「私もそう思います。ガイラさん。」

「アレフ俺のことはガイラでいい。さん付けされると背中がむず痒くなる。」

「わかりました。ガイラ」

「おう！それでいい。しかし学者よ。さつきよく俺がいたのに気づいたな。そっちからは見えない位置だったはずだが？」

「ええ！さつき刀を抜いた瞬間、殺気を感じました。」

「ああー瞬反射的に構えたな。お前さん実は強かったんだな。一手お手合わせ願いたいものだな。」

「嫌です。多分命を懸ける勝負になります。まだ命は惜しいですから。それにまだ授業の続きがありますし。武器を納める理由でしたね。アレフ君。」

強引に話を戻す。

「はい。戦闘が続いているならそのままでも良さそうですし、終わつたならそれこそ急ぐ理由は無いとおもいますが？」

「最もな意見です。でもアレフ君、武器を持ったままで魔法は使えますか？」

「無理ですね。私は右手を使わないと魔法は出せません。」

「だろうね。だから武器を納める練習をします。まさか魔法を使う度に武器を棄てるわけにはいきませんから。」

「そうですね。あまり戦闘中に魔法を使うことはありませんでしたから。」

「これは私独自の解釈です。あまり他にやっってる人はいないでしょうね。じゃあ練習あるのみ。」

アレフは練習を再開する。やはり納剣にもたつく。これだけは慣れないと難しいだろう。俺とガイラが暖かい目で見守る。数回繰り返し返してアレフが手を止める。こちらをふりむくと

「質問です。毎回自然体に戻す理由は？」

「ああ！それはな常在戦場ってやつだ。うちの流派でもよくやらされた。」

「ジヨウザイセンジヨウ？」

「常に戦場に在りつて意味ですよ。どんな時でも対応できる様鍛錬するんです。」

「そうだ。アレフ。気が抜いてると死んじゃうぞ。」

ガイラは素晴らしいながらアレフに向かってとことこ歩く。そして直前で流れるような正拳突き。もちろん顔面に寸止め。

「わっ！」

「もし今に対応できたら、私からは免許皆伝です。それとガイラ、私には止めてくださいね。反射的に刀で受けてしまいそうです。」

素晴らしいながら刀を半分抜いて目の前に鞘ごと構える。ガイラがむうと唸る。

「ではアレフ。後は自分で練習して下さい。とりあえず一週間はいつもの素振りを10セット、その後はこの練習を10セット行なって下さい。ではガイラ、積もる話もありますからあちらで話しましょう。お茶ぐらい出しますよ。」

そして二人で食堂に向かって歩く。ガイラが軽口を叩いた。

「しかしまあ、お前さん鬼だな！」

「なにが？」

「なにがってさっきの鍛錬だよ。ありゃきついぜ。根をあげても知らないぜ。」

「いつでも止めていいと伝えてありますよ。ただ今のまま放り出したら死にます。そうなる前に勇者を止めさせるか？自分で強くなるか？それだけです。」

「優しい鬼だな。」

「鬼ですか？私は桃太郎に退治されたくないですよ。」

「言うねえ。しかし桃太郎を知ってるとは博学だね。さすが学者だ。」

・
・
・

積もる話はしばらくやむことはなかった。

裏の事情

5 / 6 勇者支援官6日目

日課のトレーニング、日課の師匠の真似事、その後の食事。そこにサイモンがふらふら現れる。少し痩せたか？げっそりして目の下に隈ができています。

「よお！サイモン、久しぶり。4日ぶりか？何してた？」

サイモンが俺の前に座り、テーブルに突っ伏す。

「うう行軍訓練でガライまで行ってた。今帰ってきた。お前のせいだ。」

「何でだよ！理知的に説明して頂きたいな。」

「この間ここで大盤振る舞いしただろう。あの後隊長にばれて大目玉だ。お前のせいだよ。」

「あほか、全部自業自得だ。でもまあ徒歩3日でガライ、ルーラで戻ってお釣りが来る日程だろうが。」

「違う違うんだ、往復で4日。しかもフル装備、物資無しで一個中隊の行軍。しかも俺が中隊長で全員任せたって俺達だけで行かされた。死ぬかと思っただぞ。」

「なるほど、それはすごい。たるんだ馬鹿にはちょうどいい。」

ラダトームの軍組織は次の通りである。小隊長が3人の部下を率

いて一個小隊。それを4隊で一個中隊。一名が小隊長と中隊長を兼任する。同じく4部隊をまとめて大隊とする。この頂点に立つのが近衛騎士隊長である。つまり近衛騎士は64名しかいない。ただそれだけでは足りないので一般兵士もいる。さらに必要に応じて民兵を雇うこともある。

先の戦いで近衛の約半数が失われ、かつ先の近衛隊長も無くなったらしい。その後就任した今の近衛隊長は当時生き残った最高位で、身分などうるさい近衛の中ではめずらしい叩き上げだ。普段は結構気さくでフランクな人だが怒ると相当怖いようだ。

行軍訓練。総員で隊列を組み目的地までひたすら歩く。ただフル装備、物資無しというのはまず鉄の剣、盾、鎧を着込み、更に野営用の荷物を背負う。総重量は約50kgぐらい、俺には絶対無理。さらに最低限の水しか持たず食料は現地調達、もし手に入らなければ無しの過酷な行軍だ。もちろんモンスターは出現する可能性はある。まあ殺気だった16人の兵士を襲ってくる魔物はガライまでにはないだろうけど。

「今日は一日休息が許された。部屋帰って寝る。」

サイモンがふらふら出て行った。

- - - - -

俺は近衛控え室に来ている。隊長に聞いてみたいことがある。隊長室をノックして入室する。

「聞きましたよ、アイゼンマウアー隊長。」

「何をだ？ケルテン特務隊士。」

近衛隊長も心なしかやつれている。やっぱりな。

「行軍訓練ですよ。大変でしたね。」

「ふん！たるんだ連中を引き締めただけだ。俺はなにもしていない。」

「そうですね。でも隠れてついでに行ったのは秘密ですか？」

「知らん、なんの話だ。雑談ならまた今度にしてくれ。書類仕事が溜まっている。」

この人なりの照れ隠しだ。しかし語るに落ちてるよこの人。

「まあそついうことにしましょうか。勇者について聞きたいことがあつてきました。」

「俺に答えられることなら答えよう。」

「ええ、先日落第勇者に言われまして、お前が勇者やれつてね。これは駄目ですか？」

「それは駄目だ。」

「即答ですね。不足しているのは力量ですか？それとも器量ですか？結構自信があつたのですが。」

「そのどちらでもない。正規の軍人は勇者にはなれない。」

「なぜ？と聞いてもよろしいですか？」

「ふむ、ここからの話は極秘になるがよいか？」

「結構口は堅い方です。」

「よろしい。少し話しが長くなる。あちらで話そうか。」

隊長はソファに腰掛ける。隊長が座るまで俺は立っている。

「まあかけてくれ。」

「はっ！では失礼します。」

「ではさっきの話だが、ローラ王女が誘拐された件と関わりある。」

「話の先がみえませんか？」

「そう結論を急ぐな。その後竜王側より秘密裏に交渉があった。」

「交渉ですか？身代金とか、降伏勧告ですか？」

「君は頭がよすぎるな、まあ聞け。そうではなかった。あちらの要求は一つ。双方の軍事活動の停止。」

「はあ？でもまだ対立は続いてますよ？モンスターは相変わらず襲ってきますし、こちらにも勇者を派遣してます。」

「そうだな。詭弁、茶番、俺の嫌いな政治的駆引きらしい。」

「政治的駆引きですか？ということは交渉は大臣がなされたので？」

「そうだ。先の戦でこつちもかなりの犠牲があつたが、あちらも結構な損害があつたらしい。ドムドローを落としたとは言え何か手に入つたわけでないからな。」

「なるほどラダトームは必死の攻防で追い返し、メルキドは城砦とゴーレムで、リムルダールは湖とちよつとした小細工で侵攻を止めた。」

「ほう、話には聞いていたがあれはお前の仕業か？」

「何の話です？まあ街が無事だったので。よかつたではないですか？」

「よい、そういうことにしておこう。で、これは想像の域をでないがあちら側はこちらの最大の利点を潰すのが目的と思われる。」

「最大の利点？」

「わからぬか？では聞こう。個々の強さでは我ら人間と魔物どつちが強い？」

「なるほど。個々の強さに自信のある魔物は人間の集団連携を恐れ、封印した。」

「そうだ。王女の命を盾に取られてはこの要求を吞まずにはおれなかつた。」

「代々と言われますが、どの程度遡れますか？」

「家系図があるわけではないから詳しくはわからないが、400年
口下の時代までは遡れるらしい。」

間違いない！確信した。この剣の銘は？

「いいわ。でも何持ってくるの？」

「それは後のお楽しみ。じゃ10分後にまた。」

俺は自室に戻り荷物を漁る。確かどっかに片付けたはず。

.....

王立図書館。ここはいつもマギーと俺しかいない。その他のマギーが目当ての男はマギーが追いつ返すから俺がいないときはだいたい一人で何か読んでいる。最近はペンを片手に紙と格闘している。

「何から知りたい？さっきの剣？約束のプレゼント？それともこの間の宿題？」

「当然もらえる物が先。ちようだい。」

「まったく現金だな。とっておきの品だ。驚け！」

手にしていた包みを開くと半透明な水色の布を取り出して手渡す。マギーが手に取り開いた。

「何これ？ローブ？スケスケじゃない。」

「いや透けないから大丈夫。それは水の羽衣。炎のダメージを減少する効果がある。昔、雨の祠の集落で見つけた。多分勇者一行の女僧侶が着ていたローブじゃないかな。」

「そんな大事な物いいの？」

手にした本を開いて中をパラパラめくる。彼女が本を見る目はいつも輝いている。

「まあね。で、さっきの王家の秘宝の話、今は別の名の方が有名だ。ロトの剣、ロトの鎧、そしてロトの盾だ。ただし今現在は所在不明。とても残念だ。」

「そう。でも見つけることができたら竜王も倒せる？」

「さあ？それは分からない。強い武器を持つだけで強くなれるわけじゃないからね。」

「そんなの知らない。武器なんて握ったことないもの。」

「君はそれでもいいさ。でも武具によつては魔法と同じような効果を持つ物がある。さっきやった雷神の剣とかね。」

「でもあんな魔法見たことない。」

「いや君は一度見てるよ。本の挿絵でね。」

「えっ！ああ、この間のギラ・・・でも炎の大きさが違う。」

「うん。挿絵のはギラだったね。でもさっきのはベギラゴン。ギラ系の上位魔法だ。」

「でも、ベギラマはギラの上位魔法だって・・・。」

「言ったね。正確にはギラ、ベギラマ、ベギラゴンの順に効果が大き

きくなる。」

「もう！いつになったらあなたの知識に追いつけるのかしらね。」

ちよつと拗ねた顔で俺を見つめる。

「まだまだだね。宿題はできたのかい？」

「また馬鹿にして。いいわ、研究の成果を見せてあげる。ちよつと待ってて資料取ってくるから。」

マギーはいつも座っている机に歩いていく。

魔法の武器（後書き）

長いので分けます。

美女と魔法談義 その？

準備される黒板、教卓、チョーク、支持棒、資料を教卓に積むマジギ。

「ちょ！なにそれ。先生みたいだ。」

「もう馬鹿にして！これでも宮廷魔術師筆頭で弟子もいっぱいいるのよ。」

「あゝごめんごめん。そうだった。じゃあ先生質問です。3サイズは？彼氏いますか？」

「あのね〜そういう質問一番嫌いなんですけど・・・次言ったらぶつとばすよ。」

「冗談だよ。そういう質問多いんじゃないかって？」

「心配？」

「そりゃあ・・・まあ・・・心配じゃないって言ったら嘘になるかな？」

「もうはつきりなさいよ！いいわ！では講義を始めます。今日は魔法の詠唱についてです。」

チョークのカツカツ言う音が響く。結構手馴れている。書かれていますのは4行のギラの詠唱文だ。次に比較し易いようにラリホー、マホトーン、トヘロスを並べて書く。少し離してホイミも書く。

「言ったよ。1ページに一つずつ魔法詠唱文が大きな字で書いてある。」

「意地悪なのか？親切なのか？判断に悩むわね。」

「そつ？君もやらない？有望な生徒を答えに誘導したりしてしない？」

「やる。でもやられるとむかつく。」

マギーが目の前でムキー！ってなってる。うわっ！めちゃくちゃかわいい。

「よし、では教師と生徒交代だ。テキストはそれね。7ページを開いて。」

「当然読めないはね。でもちょっと他のページと違う。下にいくつかの単語が並んでいる。」

「その通り。よく気づいたね。」

「さっき言われたばかりだからね。法則性と違和感だったかしら？」

「脱帽です！お嬢様。」

そつ言いながらかぶつてもいない帽子を脱ぎ、一礼する。

「続けようか。実はそのページはルーラだ。」

「ルーラ？こんなにいろいろ書く必要あって？」

「うん。今のルーラは城に戻る魔法とされているけど、本来は指定した場所に行く魔法だ。」

「この間マイラに行ったのがこれね。ねえ、じゃあなんで普通のルーラはラダトームにしか戻れないの？」

「それはラダトームを指定しているから。下に指定場所の登録名が書いてある。一番上がラダトーム。別の言語で地下の城という意味。」

「地下？意味深ね。」

「文字通り、勇者はこの世界に落ちてきたからそう名づけた。」

「名づけた？もしかしてルーラの指定場所は勇者が登録したの？」

「その通り！勇者が訪れた場所にある魔法儀式を行い、登録名を決めた。そこにあるのがラダトーム、マイラ、ドムドーラ、メルキド、リムルダールだ。ああドムドーラに取り消し線引いといて。」

「取り消し線？」

「もう使えない。多分座標指定石が破壊された。該当する魔術儀式はまだ説明できていないから仮名ね。でもその基準はなくなったら困るでしょ？だから人の力では動かせないくらい大きい石に魔術儀式で登録名を掘り込んでいる。」

「へえ〜すごいね。でもなんで普通に名前じゃないの。ラダトームって書いておけばいいのに!」

「便利すぎるから駄目。その気になれば何人の兵隊でも送れてしまう。多分勇者はそう考えて自分達の専用魔法としたと俺は思っている。」

「ふ〜ん。徹底した平和主義者ね。自分が死んだ後まで心配しすぎじゃない?」

「ははっ! まあ尊敬する勇者様のことは置いて、まずそのページから学習してごらん。他の魔法の解説に参考になるよ。」

「そうね。他のページはどれがどの魔法だかさっぱりわからない。あれ? ちょっと待ってその勇者専用の登録名はどうやってわかったの? またどこかの遺跡でも見つけたの?」

「外れ! その基準石に書いてある。普通は見えないけどレミ〜ラで照らすとうつすら見えてくる。魔法による隠し文字だ。実は王家の秘術: 血の契約書にも同じからくりがある。結構えぐいことが隠して書いてある。これは絶対秘密ね。ばれたら消される可能性が高い。」

「じゃあそんなこと教えないでよ。」

怒ったような顔でおれを見る。怒った顔も美しい。もうちょっとこの顔が見てみたい。

「あともう一つ。そこには書かなかったが実は竜王の城にも基準石がある。」

「え！じゃあ行けるの？」

「行けるよ。でもこれは勇者が置いたものではない。じゃあ誰が置いたのでしょうか？」

「それは簡単ね。魔物が帰るために置いた。」

「その通り。だから以外な名前が登録されていた。知りたい？」

「まあ教えてくれるなら。」

「じゃあ言うよ。怒らないでね。勇者達とは違う言語で『大魔王ゾーマ様の城』って書いてあった。」

あつと驚く。そりゃね禁忌中の禁忌とされ、しかも伝わっていない名前が耳に入ってしまったから。

「ああ、もう最悪。それは言わないでって言ったじゃない！」

「教えてっていったじゃない。それに今更恐れることなんかないさ。」

「どづいう意味よ！」

「もう第二の魔王が現れているんだ。これ以上悪いことは起きないさ。第三の魔王が現れるにはまた200年ぐらいかかるのさ。」

「何それ。今度は預言者のつもり？過去から未来まで全てあなたのものなのかしら？」

俺は預言者じゃない。ただ知っているだけ。でもこれだけは教えない。

しばらく沈黙が続く。

「まあまだ来ない未来の問題は未来の住人に任せよう。今はその問題を解くのが先、レポートにして提出してね。期限は特に決めない。随時質問には答える。途中経過を披露してくれてもいい。」

「わかったわ。絶対負けない。あなたの知識は全部私のものにしてあげる。」

俺は退室することにした。彼女が本に集中しだしたらもう誰の声も聞こえなくなるから……。

いつも通り朝食をとっている。起床6時、2時間のトレーニング、それから食事。もう10年近く続けている。なるべく生活リズムは崩さない。

「ケルテン殿よろしいですか？来客です。」

騎士見習いの一人が控えめに話しかけてくる。俺そんなに怖いかな。対外的には紳士なつもりなんだが。

「ああいいよ。ところで誰かな？」

「ゲオルグ、クロウ、ドゥーマンを名乗る三名です。」

「ああ彼らか。いいよ通して。」

「ここにですか？」

「かまわんよ。待たせるのも悪いしね。」

「判りました。では案内してきます。」

どうしたのかな？ガライに行く許可でも得にきたのかな？ならいいのだが……。そんなことを考えていると見習いに連れられて三人が入ってきた。ほう、装備が変わっている。先日教えた通り二人が革の鎧、革の盾になっている。武器は変わっていない。

「お久しぶりです。ご指摘どおり装備を整えました。近くで野営などの練習もしました。ガライへ行く許可を得たいのですが？」

「お借りし・・・いや借りとく。必ず返す。」

「それでいい。がんばれよ!」

三人は食堂から出て行った。案内してきた見習いが突っ立つたままで見ている。

「どうした?もう終わったよ。」

「先ほどの・・・いえ何でもありません。失礼します!」

なんだよ。別に逃げなくてもいいじゃないか。

その後騎士見習いの中に根も葉もないうわさが流れたのを俺はしらない。

視線だけで人を殺せる。

機嫌を損ねると死ぬまで追い詰められる。

そつだ。勇者ガルドはどうしただろう?後で調べることでしょう。

.....

国務大臣執務室

おっ!ガルドの光点が移動している。あいつの移動速度だと明日の昼には戻ってくるかな?ちょっと気になるから担当外の連中も見てもみよう。

「判りました。拜命します。」

よしリムルダールについた頃に会いに行こう。

外野から非難の声が聞こえた。

「今、卑怯だと言ったやつ前に出る!」

人集りのほとんどが顔を伏せ目を合わせない。前に出るやつはいない。

「まあいいでしょう。今私は殺す以外はルール無しとした。もちろん魔物にはルールはありません。今卑怯だと思った者全員死んだと思え。アレフ!お前は卑怯だと思っただか!」

「いいえ。私は師匠の間合いや剣速に気を取られて、魔法の存在を忘れていました。さっきまでその話題をしていたのに。」

アレフは悔しそうに話す。左手で打たれた右手をさすっている。

「よろしい。なぜ負けたか理解できればそれでいい。ここなら次があるからな。手をだせ。・・・ベホイミツ!」

赤く腫れていた右手が元通りになる。

「一本で終わりか。終わりならいつもの練習だ。」

「まだやります。」

「そうか。では次は木剣と木盾を使おう。俺も木剣を使う。ちなみに木の盾ならベギリマは通らん。」

「判りました。同じミスはしません。」

「いや刀なら斬れるんだ。ただそうすると高くつく。800Gも弁償したくない。」

「本当ですか？はあ、かなわないな。」

「まだいろんな戦法がある。さらに魔物なら人間にできない戦法ができる。」

例えば飛ぶ魔物、メイジドラキーはギラを放ってくる。キメラは火を噴いてくる。がいこつとか鎧の騎士は痛覚も感情もないから多少斬られても平気で懐に入ってくる。近くが毒の沼地でもお構いなし、多分崖なら一緒に落ちるだろうね。あとドラゴンとかゴルドマンとか体の大きさが違いすぎるモンスターには常識は通用しない。」

「まだまだですね。ありがとうございました。いつもの練習に戻ります。」

「よし皆解散。時間のある者どうしで模擬戦でもやってみる。多分さっきまでと違う戦いができるぞ。」

俺とアレフは隅によるといつものメニューを始めた。あちらこちらで模擬戦が始まる。今日の訓練場はいつもより活気があるようだ。

模擬戦（後書き）

アレフが皆さんの替わりに質問をします。

「もういいです。武官の方の神経はわかりません。最初からわざと挑発したでしょう?」

「わかる?人柄を確認したくてね。ありや駄目かな。次来る時もあるべく立ち会つよ。もし俺がない時来たら近衛に声かけて立ち会ってもらう様に。いいね。」

「頼まれなくてもそうします。ああいう人は嫌いです。」

「君の評価も参考にさせていただきます。そういえば名前を聞いていませんでしたね。」

「メイヤーです。一応男爵号を持っています。あなたのことは存じてます。ある意味有名ですから。」

「あっそう。これからもよろしく。メイヤー男爵。ではまた来ます。」

「毎日一回は来てください。」

「はいはい。」

俺は背中を向けて軽く手を振ってここを去った。

「いえ、殿下の武器はかまいません。ですが護衛の方の武器をお預かりすると申し上げております。」

「私の部下の武器は私の武器そのものだ。それでも預かると言うか。」

「ええ、なりません。殿下と言えど遵守して頂きます。」

「貴様、大臣殿の覚えがいいからと増長するな！」

「ふん。貴様など図書館でも大人しくしているがいいわ。」

「おのれ、筆頭魔術師殿もこんな男のどがよくて。くっ！」

また外野が騒ぐ。なんか個人攻撃に変わったぞ。しかも筆頭魔術師って、ああマギーの言ってた馬鹿ってこいつらのことか？フレールが片手を挙げると外野が黙った。よく調教されているな。

「ではどうしても通さぬというのだな。」

「ええ、どうしても通さぬと申してます。」

「ふん！この馬鹿者をやっつけてしまえ！」

そう言い放つとフレールは3歩下がる。護衛の二人が剣を抜いた。馬鹿か、ここで剣を抜くか！剣を構えた二人が威嚇するように剣を構える。

「引いてもらえませんか？事を構えたくありません。」

「ならば貴様が手を引け。」

これは時間稼ぎだ。この間に思考詠唱でピオリムを二回、さらにバイキルトを自身にかける。

「危ないですよ。そのままだと後ろの人に当たりますよ。」

そう声をかけると思わず二人が後ろを確認する。今だ！抜く手も見せぬ居合い、狙いは鉄の剣。向かって左の男の剣の刃を斬り裂く。さらにかえす刀でもう一人の鉄の剣も斬り落とす。鏗鳴りの音が響いた時、俺がとぼけた声で話しかける。

「面白い剣ですね。刃がありませんよ？」

「なっ！貴様……」

真っ赤になつたフリーゲルが口述詠唱を始めた。消費MP5の魔法、ベギラマか。間に合え！

「私はMPを5放出する

MPとマナは融合し万能なる力となる。MPとマナは融合し万能たる力

おお万能なる力よ、雷となり

る力よ、不可視の力となり

我が敵を、撃て」

よ。」

かの者の魔法を封じ

「ベギラマホトーン！」

何も起こらない。俺が上からかぶせた魔法が効果を発揮した様だ。フリーゲルが手を突き出し口をパクパクしている。

「衛兵！この者たちを拘束して下さい。」

「しかし……」

「私が全責任を負います。拘束して牢屋に入れて下さい。」

騒ぎを聞きつけた近衛騎士達も階段を下りてくる。

「国王、及びに國務大臣に対する弑逆未遂、ならびに城内騒乱罪になります。近衛の方々も手伝つて下さい。」

次々に取り押さえられる6人。往生際が悪く暴れているが容赦なく取り押さえさせる。

「父上に会わせる！」

「下郎が！私の体に触れるな。」

騒がしい声が遠ざかっていく。衛兵が引きずる様に連れて行く。

- - - - -

俺の前に不機嫌な國務大臣と近衛隊長がいる。

「これはどういうことだ。説明せよ。」

「はっ！かの者達が帯剣したまま2階への通行許可を求めました。拒否したところ抜剣、さらに魔法の行使を行いましたので身柄を拘束しました。なにか不都合がありますか？」

「何が不都合だ。あれは私の息子だ。それでもか？」

登城自粛といったところですか？またこの件は公にはするが公文書には載せない。これで大臣の面目も立つでしょう。」

大臣が苦虫を噛み潰したような顔をしている。それでも妥協した方だぞ。汚名返上、名誉挽回のうまい手だと思っただが。

「判った。そなたの言うとおりにしよう。」

がつくり肩を落とす大臣。俺と近衛隊長が退室する。かける言葉はない。

――

「しかしお前。何をした？見ていたはずの衛兵もはつきりせん？」

歩きながら近衛隊長が質問する。そうか、見えなかったか。狙い通りだ。

「ただ剣を斬り飛ばして、ベギラマをマホトーンで封じただけですよ。」

「軽く言ってくれ。お前以外の誰にもできぬだろう。まあいい。」

一部の増長した者共もしばらくは自重するだろう。」

「だといですけどね。」

「しかしまあお前、損な役回りをする。本当は俺の役割だ、すまんな。」

俺に頭を下げる。

「理解してくれる者がいるなら、それほどでもありませんよ。」

この人は敵にまわしたくない。数少ないそう思える人だ。

弑逆未遂事件（後書き）

なんの捻りもありません。あの人です。

一部修正しました。指摘ありがとうございます。

に言つてのける。誰にでもできることだつて。私は武器は持てない。
じゃあ私はこの人の知識だけでも追いついてみせる。でも力の使い
方は間違わない。それができるようになったら本当の意味で横に立
てる気がする。今はその背中を追いかけるだけでいい。

おやすみ、ケルテン。あなたに安らぎがありますように。

勇者アレフの成長

5 / 10 勇者支援生活 10日目

毎朝の教練である。昨日はここには来れなかったものでちょっと気恥ずかしい。一昨日はここで説教したせいかもしれない兵士や見習いが俺を見てこそこそ何か話している。人の噂をするなら聞こえない所でしてくれないかな。

アレフがいつもと違っていきなり抜き打ち、縦切り、納剣の練習を始める。シュツ、シュパツ、シャキン！10回くらい繰り返す。いい音をしている。なるほどね。

「ああ判った、判った。できるようになったって言いたいんだな。」

「できてますか？じゃあ・・・」

何か期待するような目で俺を見ている。

「次の準備するから少し待ちなさい。」

俺は自室に戻り、支給品の鉄の鎧を持ち出した。

「これを着なさい。」

「頂けるのですか。」

「違うよ。やっぱり貸すだけだ。いつものメニューをそれ着たままやるんだ。それが問題なくできるようになったら剣に関しては教え

り前にやってたことだ。」

「まだまだですね。」

「では飯食つたら、魔法の学習だ。ベギラマが使用できるまでは午前中は魔法の練習をしよう。」

「はい楽しみです。もう一つ質問いいですか？」

「何？」

「一昨日の夜は筆頭魔術師殿といっしょだったんですか？」

思わず口に使っていた水を噴き出した。周りでこそそそしていたやつらが手を止めてこちらを注目している。

「プツ、プライベートな質問には答えられない。」

「まずい、ごまかしてない。」

『ウワン！本当だったんだあー！俺あこがれてたのにー！』

誰かが泣きながら走りさっていった。その辺、ざわざわするな。

.....

「お前なあ。あそこであの質問はないんじゃないか？」

「食事中、肉をつつきながら文句を言う。」

「どうしても聞いてほしいと昨日言われまして、断れずに・・・すみません。」

「もう済んだことだ。もうやるなよ。ちなみに魔法の先生はその筆頭魔術師殿だ。」

「いいんですか？」

「なにが！別に魔法を教えることぐらい俺がとやかく言つことじゃない。」

「わざわざ筆頭魔術師殿に教えてもらえるってことですよ。」

「あつ！やられた。お前策士になれるよ。」

「やった。初めてケルテン師匠から一本取りましたよ。」

俺は頭を抱えた。

- - - - -

図書館である。初めて二人を会わせる。なんで俺がこんなに緊張しなきゃならんのだ。

「あゝマジー。こちらが勇者アレフ。しばらく魔法の先生をお願いしたい。」

そしてアレフ、お前は知ってるな。筆頭魔術師のマジーだ。」

「望む所です。」

例の黒板を出してマギーが板書を始める。10種の魔法を並べて書く。順番に魔法を指し詠唱文の共通点などを説明する。アレフがしきりと感心している。途中マギーがアツと叫ぶといきなり魔法書を10ページほどパラパラめくる。

「ごめんなさい。続けるわね。」

続きが再開される。任せておいても大丈夫だろう。俺は確信した。

どうやら気づいたようだね。あの魔法書にはからくりがある。最初の10ページは今の魔法が順番に書いてある。それだけわかれば・・・まあ頑張れよ。

俺は背中を向け、右手を上げひらひらさせながら出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1157y/>

勇者って一人じゃないんですか？

2011年11月8日05時02分発行